



資料2

陸の方にかなり入り込んでいました。わかりやすい表現をすれば現在の国道1号線が、信長の時代の尾張の海岸線でした。ですから、熱田神宮の南の辺りまでが海でした。(資料2)これは当時の尾張の海岸線です。名古屋市南区や海部郡南部などはほとんどが海でした。当時、熱田は海に面しており、貿易港として栄えました。

また、尾張と美濃の境に流れる川は、木曽川ではなく今もある「境川」でした。(資料3)その名の通り、当時は「境川」を境に、尾張と美濃が分かれていたのです。木曽川というのは信長の没後に大氾濫を起こして今の流れになったといわれています。ですから岐南町辺りまでは尾張だったのです。羽島、川島町の辺りは中間で、尾張とも美濃ともいえないよう両方に属している感じがありますが、古くはこの辺りは全部尾張でした。境川からは目の前に岐阜城が見えます。でも境川までは、尾張。そういう面白い話です。今の長島温泉の辺り、この辺には長島、加路戸島などと、島がたくさんあります。その北には津島があります。今の愛知県の津島市です。津島も川を介して海に面していて、ここも当時の大きな貿易港でした。

資料3

陸の方にかなり入り込んでいました。わかりやすい表現をすれば現在の国道1号線が、信長の時代の尾張の海岸線でした。ですから、熱田神宮の南の辺りまでが海でした。(資料2)これは当時の尾張の海岸線です。名古屋市南区や海部郡南部などはほとんどが海でした。当時、熱田は海に面しており、貿易港として栄えました。

また、尾張と美濃の境に流れる川は、木曽川ではなく今もある「境川」でした。(資料3)その名の通り、当時は「境川」を境に、尾張と美濃が分かれていたのです。木曽川というのは信長の没後に大氾

濫を起こして今の流れになったといわれています。ですから岐南町辺りまでは尾張だったのです。羽島、川島町の辺りは中間で、尾張とも美濃ともいえないよう両方に属している感じがありますが、古くはこの辺りは全部尾張でした。境川からは目の前に岐阜城が見えます。でも境川までは、尾張。そういう面白い話です。今の長島温泉の辺り、この辺には長島、加路戸島などと、島がたくさんあります。その北には津島があります。今の愛知県の津島市です。津島も川を介して海に面していて、ここも当時の大きな貿易港でした。

ライバルはみな名門出身

もうひとつ面白いのが、この頃の信長の敵だった戦国大名ですが、その多くは名門の出身でした。例えば武田信玄は、甲斐源氏の嫡流。上杉謙信は桓武平氏の流れ。今川義元は、室町将軍家の一門です。みな名門だったのです。ところが信長はもともと大名でもなく、家柄も全然よくない。他の有名な戦国大名とは少し違うのです。それゆえ信長の動きは、今の時代でいくという図式に近いかと思いま

うと新興企業が名門企業を潰してみます。米の取れ高でこの時代の状態をみると、武田信玄の甲斐

はわずか22万石しかありません。

長尾景虎の越後も39万石。

川義元の駿河にいたっては15万石しかありませんでした。遠江は25万石。さらに三河は29万石。駿河・遠江・三河の大名の今川義元は合計して69万石です。これに

信長は大名の出ではない

信長の先祖は、福井県の丹生郡織田庄の出身で、1400年前後、つまり信長の生まれる百数十年前に、尾張守護となつた斯波氏の家来として尾張にやってきた一族だといわれています。その織田庄の織田とはどんな家かというと、神社の神官だったのではないかといふ話もありますが、実はよくわかつていません。

守護は、幕府に命令された今でいう県知事のようなものです。尾張では県知事の下に守護代といふ役事が2人。そのさらに下に三奉行がいて、その三奉行の一人が

特集

[講演録]

これまでの歴史常識とは異なってきた信長像とその経済的背景

～尾張時代の若き信長、その本当の姿～



歴史ライター
水野誠志郎 氏
株式会社デイズ 代表取締役

今年は、織田信長公の岐阜入城・岐阜命名から450年が経つ節目の年です。現在岐阜市内では、「岐阜市信長公450プロジェクト」と題し、1年を通じてさまざまなイベントが開催されています。

当所では、去る5月1日に開催しました議員懇親会において、歴史ライターの株式会社デイズ 代表取締役 水野誠志郎 氏をお招きし「これまでの歴史常識とは異なってきた信長像とその経済的背景」と題してご講演いただきました。

今月号ではその内容を紹介し、この講演録を通して「信長」という人物の歴史を再発見、そして「信長公ゆかりのまち・岐阜市」を再認識していただければと思います。



「信長」という人物に関しては、最新の調査・研究等によってこれまでの歴史常識とは随分異なった姿が見えてきました。信長は1534年に生まれ、満33歳で岐阜に入りました。そこから本能寺の変までの15年間の話は、世の中でとてもよく知られています。ところが信長が33年も生きている間の話は、ほとんど知られていないのではないか。実はここが一番面白いところで、この部分を勉強していくと、これまでの信長像が随分変わってくるのです。

1560年の桶狭間の戦い、それはここが一番面白いところで、この部分を勉強していくと、これまでの信長像が随分変わってくるのです。

そこで信長の時代の尾張についてお話しします。(資料1)現在の地図とは随分違います。海岸線は内

海岸線と川は今と異なる

つまり当時の尾張というのは巨大な経済大国で、この経済力が信長の力の最大のバックボーンだったのです。

戦国時代は寒さが原因か

の少し前あたりの日本は、小氷河期であつたといわれ、今よりすごく寒かったのです。寒さや干ばつによって作物が実らず収穫ができぬ。実はこれが「戦国の世」ではない。実はこれが「戦国の世」となったひとつの原因でもあるのです。

つまり戦をして他国から食糧や物を奪つてくる、というのが戦国大名の大きなテーマだったのです。

皆が「天下統一」を目指して戦うという壮大な話ではなく、実際は食

うための戦いが大半だったということです。

守護は、幕府に命令された今でいう県知事のようなものです。尾張では県知事の下に守護代といふ役事が2人。そのさらに下に三奉行がいて、その三奉行の一人が信長の家だつたといわれています。これは今でいう部長クラスの役職です。ここではつきりとわかつて

が良かったようですが、道三は、信長が尾張を統一しようとしている最中に、息子の義龍に殺されてしまします。この息子、実は道三の子ではなかつたのではないかと言われています。もともとの美濃の守護は土岐氏です。土岐頼芸というのが最後の守護ですが、この人の子どもだつたのではないかという話があり、それで義龍は道三を殺したのではないかという俗説もあります。

桶狭間～小牧 そして岐阜へ

資料4



いることは、信長は「大名の出身ではない」ということです。ですから信長は、常に「偉い人を立てること」です。守護の斯波氏のことから攻めるのではなく足利義昭もすっと立てていましたし、例えば岐阜に来て上洛するときも、自分から攻めるのではなく足利義昭を立てています。革新的だというイメージの信長ですが、意外とそこが立てるのではありませんか。信長の家は大した地位に無いのですが、信長の祖父や父がかなりのやり手だったということです。祖父は津島という貿易港を支配下に置き、そこから様々な権益が入るようにしました。その経済力はすさまじいものであつたといわれています。信長の父、信秀がその権益をベースに尾張でたくさん仕事をしました。当時信秀は、朝廷の壊れた堀を直すのに4000貫文、今でいう数億円を出しています。伊勢神宮にも700貫文、1億円ほどを出しています。そういうことができてしまふ程お金持ちだったのです。

いることは、信長は「大名の出身ではない」ということです。ですから信長は、常に「偉い人を立てること」です。守護の斯波氏のことなど立てるまでもなく、足利義昭を立てています。革新的だということイメージの信長ですが、意外とそくではないことが多いのです。

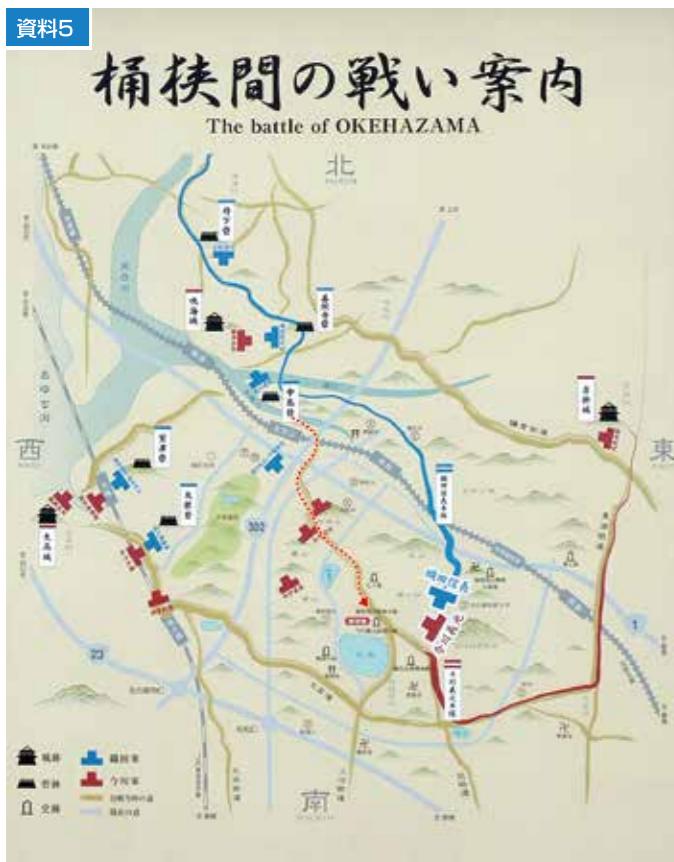
尾張中から金で兵を集め る

信長は、父の信秀が勝幡にいたころに生まれていますから、勝幡城生めになります。これも最近の定説になつてきています。信秀は42歳で亡くなつてしまい、当時18歳の信長がその権益を全部引き受けました。人生50年の時代の18歳ですから、もう立派な大人です。とはいへ若手ですから、反抗する者もいました。後に長く信長を支えた柴田勝家も当時は信長と争い、勝った信長に頭を丸めてお詫びしたという話もあります。これは今の名古屋市西区は全然違う柴田勝家の姿が、当時あまり知られていません。後の姿とはあつたのです。

若き信長の最大の課題は、とにかくこの财力と地盤、実質3代目

の地位をどうやって受け継ぐかでした。そこで考えたのが「自力での武力強化」です。父の代まではあちこちの偉い人から兵隊を借りて戦をしていましたが、信長はそれではいけないと思い、財力で私兵をかき集めて直属の兵隊を持ったのです。これは800～1000人位いたらしいですが、これが信長の一番の大きな力になつたのです。信長が派手な傾奇者の格好をして尾張を回り、百姓の二男や三男から自分の役に立ちそうな奴を引っ張り上げていたという有名な話には、そんな狙いがあるのです。（資料4）当時こんな恰好をしていたといわれています。虎の皮のパンツとかこういう派手な格好でぐるぐると尾張を回っていたのです。彼が若い時からこんなことができたのは、いわゆる大名の子弟もでも殿様でもなかつたからでしょう。

資料5



古戦場公園の案内図(赤い点線は筆者の説)

勝利を境に世の中がガラツと変わったのです。というのは、この信長以降の武将には「生まれついての身分」というものが関係なくなつたからです。その例が秀吉です。身分とは関係なく武力・知力で出世できる世の中ができていくのです。徳川家康の家も実はどういった出身なのかよくわからないというのが、最近の研究結果です。源氏の出身ではなくても将軍になれるという世界を信長が作つていつたのです。そういう意味では近世への幕開けを担つたのが信長であるということは、間違いないと思

桶狭間の戦いには多くの謎があります。（資料5）これは桶狭間周辺の地図ですが、熱田、笠寺がありて、海岸線が今の国道1号線で、鳴海の駅辺りは海で、今大きなインター・エンジのある大高辺りにあつた大高城を今川義元が助けに来たのです。桶狭間の戦いは迂回しての奇襲ということが定説でしたのが、最近は「信長公記」の記述を重視し、正面から攻撃したという説が歴史業界のほぼ主流となっています。

ジョンである「天理本・信長公記」というものが注目されており、そのなかに「大高の南、大野・小河衆置被」と書いてあります。これは今までの信長公記に入っていますが、これまでの大高城の南側には砦が何にもありません。これでは大高城を囲んだことにはなりません。しかし先の文章には南に2つの衆を置いていたと書いてあります。こういうまだ解かれてない謎がたくさんあります。それを解いていくと桶狭間の戦いのとらえ方がまた変わってきます。ここ数年でもどんどん話が変わっています。それが今の最先端の歴史業界なのです。歴史の世界はとても面白いことになっています。

尾張の首都として作られた小牧

そして最近解ってきた一番面白い話が小牧です。岐阜に入る前、信長は小牧山に城をつくりました。これは岐阜攻めのための城だったと俗にいわれていますが、実はそうではなく、小牧城はとんでもない城だったということが最近解ってきたのです。何がとんでもない城だったということです。石垣は発掘で出てきました。当時、高石

垣は一度に組めなかつたので三段にして組んだのでしょうか。しかし下から見上げると一段の高石垣に見えるのです。こういう視覚効果を狙った石垣の城は当時の城としては画期的で、初めてといつてもいいものです。こんなものをなぜ信長が作ったのか。それはまだ謎です。当時の敵方、犬山の連中はこれを見てかなわんと思い逃げてしまつたくらいです。それほど素晴らしい建築物を作っていたのです。それが今、発掘で見つかったのです。(資料6)

発掘していくと町も出てきます。ちゃんと碁盤に区割りされ、上水道下水道まであるという



小牧山城石垣発掘現場

町がみつかつたのです。信長はどうやら美濃を攻める前に、小牧を尾張の理想的な首都にしようと考えられ

り上げたのではないかと考えられています。(資料6)

今から450年前、信長は岐阜に入りました。わずか4年余りで

小牧を引き払い岐阜に来てしまつたのです。信長は戦いだけではなく都市作りも行っていたのです。

私は、この小牧山城は、後に家康が埋めてしまつたのではないか

と思っています。小牧長久手の戦いで家康はここに本陣を置きました。信長に関わる戦国期の偉大な城を、家康が何らかの目的で埋めたのでは、と思っています。

そのおかげで全く発掘されないままだつたものが今になつて次々

発見され、歴史が書き変わつて

るのです。愛知県の定光寺とい

うあります。そのなかでこの城のことを「火車輪城」と書いています。

私は火の車輪の城とは何だとずつ

と思つていました。それで私はこ

う考えました。石垣の段の間にぐ

るりと松明を立て、夜になるとラ

イトアップされてまるで「火の車

輪の城」になるのではないかと。

信長が安土城でライトアップをや

つたという話は有名ですが、それ

に自分の理想の巨大都市を作ろうとしたのです。信長は戦いだけではなく都市作りも行つていたのです。そこでここに理想の都市を作り、楽市楽座を設けて城下の経済を活性化させ、ここから天下を目指したのです。

岐阜は小牧以上に素晴らしいところだつたようです。そしてここに自分の理想の巨大都市を作ろうとしたのです。信長は戦いだけではなく都市作りも行つていたのです。そこでここに理想の都市を作り、楽市楽座を設けて城下の経済を活性化させ、ここから天下を目指したのです。

私は、この小牧山城は、後に家康が埋めてしまつたのではないか

と思っています。小牧長久手の戦いで家康はここに本陣を置きました。信長に関わる戦国期の偉大な城を、家康が何らかの目的で埋めたのでは、と思っています。

そのおかげで全く発掘されないままだつたものが今になつて次々

発見され、歴史が書き変わつて

るのです。愛知県の定光寺とい

うあります。そのなかでこの城のことを「火車輪城」と書いています。

私は火の車輪の城とは何だとずつ

と思つていました。それで私はこ

う考えました。石垣の段の間にぐ

るりと松明を立て、夜になるとラ

イトアップされてまるで「火の車

輪の城」になるのではないかと。

信長が安土城でライトアップをや

つたという話は有名ですが、それ

歷史はひとつ発見により、様々な出来事の謎が解かれています。それが歴史の面白さです。私もまだ謎が多くて興味深い尾張時代の信長を中心にして、この地域の歴史の研究・取材を重ねています。

歴史ライター
講師: 水野誠志郎 氏
株式会社ダイス 代表取締役

1956年生。名古屋市守山区出身・西区那古野在住。ハンド活動から1982年に名古屋の出版社に転身。自動車雑誌、タウン雑誌など編集を経て、1997年に編集出版・web制作を手がける株式会社ダイスを設立。代表を務めつつ、自動車ライター、歴史ライターとして活動中。自動車ライターとしては、webを中心に執筆。歴史ライターとしては、2012年に「信長公記で追う桶狭間への道」を出版。尾張時代の信長に関する歴史を中心に研究・取材を重ねる。現在、中日新聞プラスに「尾張時代の信長をめぐる」を連載中。また、講師として鶴ヶ島中日文化センターで講座を開講中。



より詳しい内容はこちから
をご覧いただけます